



徒然草 下



Handwritten text in cursive script, starting with a large initial character. The text is written in a fluid, connected style.

頁九

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style.

Handwritten mark or character at the end of the page.

とていふまゝに〜のすねをひくろふに乾馬よりお
ちて死すもりきた長〜あつて云非のこ〜
か〜おりの所〜い〜好ぶ相を〜人れ同〜
をなめて批鹿〜して沛艾の馬成好〜かくは
相を形相を飾り〜い〜ふ〜中あやまのたろとを
いひあはれ

百三

のすねをひくろふに乾馬よりお
ちて死すもりきた長〜あつて云非のこ〜
か〜おりの所〜い〜好ぶ相を〜人れ同〜
をなめて批鹿〜して沛艾の馬成好〜かくは
相を形相を飾り〜い〜ふ〜中あやまのたろとを
いひあはれ

百四

あやまの〜の〜あ〜い〜か〜の〜ま〜の〜つ〜
あふあ〜つ〜て〜う〜勢〜
あは〜い〜い〜い〜ち〜く〜人の〜ま〜を〜
あ〜も〜み〜す〜そ〜軍〜の〜人〜が〜
て〜二〜里〜と〜あ〜れ〜の〜上〜
あ〜の〜あ〜の〜あ〜の〜あ〜の〜

百五

あは〜い〜い〜い〜ち〜く〜人の〜ま〜を〜
あ〜も〜み〜す〜そ〜軍〜の〜人〜が〜
て〜二〜里〜と〜あ〜れ〜の〜上〜
あ〜の〜あ〜の〜あ〜の〜あ〜の〜

日まのくそく秋のくろあくあひまはやめてなれき
 とあふりし夏よりよすふ梅の無心秋のふさむ
 くねの十月のふまはあまきそをまきくねの梅も
 法をぬ本はくろの落るも先おらしてあまひま
 あすすやらのあまきしんくろふもくしんてあ
 留りりむしんくろ氣下たすけそふあまきしん
 空は法つくけふりしんやしん生る病死のくね
 日某秋こと又是ふさたの四季は終はしんれ
 糸のあてあり死期まはあてしんくろ死のく
 下架しんれ来しんあひのてましん終しんくろ
 人皆死あふさしん終知しんまらしんくろ急な
 ねもあまはあすしんて来るあまはあひあひ
 けるしんくろあまはあひあひあひあひあひ
 一と

百三

大臣の大懇合のあまはあひあひあひあひあひ
 ちくわと常はあまはあひあひあひあひあひ
 殿としてあひあひあひあひあひあひあひあひ
 きんふよあひあひあひあひあひあひあひあひ
 あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 故実あひあひあひ

頼長

口はつとちたろあをほくおりのきおる

百五十五

みふむすひといふをきほ結ぶかたは

晴といふ中見ふはしむ及いぬあるをこ

方紀人おほをほき紀あるいふ人あまの

那事

百五十六

門子顔ふをふをういふいふよかぬよかぬ

中少路れ高様つゝ歌のくるをいふいふ

の横おのうけをもよひぬよかぬいふいふ

と及帯たるりぬきおるあまのいふいふ

護摩をくといふもあつゝ護摩を

いふいふいふいふいふいふいふいふ

らむいふいふいふいふいふいふいふ

七首といふいふいふいふいふいふ

百五十七

遍昭寺れ承仕法神地のを成日集つて

堂の内より解とて記して戸をふとあふ

まは敷も志ん入るるけりはをすし入

まゝの目録見ると

百十二

人同の心ある業成る我事春のり
雪佛と張りてしをわふまに記珠玉はるはり
をてねと事増とめてしと流る事おしりそ
う海人と結くう安直してしや人の事
有とみるほしと下より溜ると書れとく

百十三

ねから地事学事うことりまはし
つるふさうのりあ人あぬをれ送よれま
何の道我道あり海かしくはふ見待し
物とていついんあもれと事し
よたふらうねあふりちぬをれあ
るえのあふしや海一ねつ習つと
やうしてありて森我智ととり出て人
あはれふ角もれにのなをけけ牙
何る物のまはとらみおれゆまひたり人
とてい善ふ不らう次物とあはれと
徳とす他事海とふことれまはた
るまにほくは才藝能をれをれま
先祖の誉もて人ふさうと続り
人またしひま業に出てとれ

あそく此の如くわくくつてい

頁十三

黒戸冬小松の雨門位おつせ給て者そく

にりし海し時まほふ事せむあひりしと

統給て帯にいふよせあひかろはたなりと

よ木にまけたまはらうたといふと

頁十三

宗尊

種余中書王おて西鞠のけりあふりてのら

まじい庭れうのありけり及いつせんと

けらふ作未隠後入る籍のふ門と車につ

あひくまりたるけりて庭ふとれて

けりいひたりとけり西をたぐん用定有

中書人哉しあひいけり事書紙あると

いふりしに書中納まはつていふこれ

あひくまりとけりいふまきりし

あひくまりとけりいふまきりし

あひくまりとけりいふまきりし

あひくまりとけりいふまきりし

あひくまりとけりいふまきりし

あひくまりとけりいふまきりし

あひくまりとけりいふまきりし

あひくまりとけりいふまきりし

ともてしむはまのけいといはれおしよひのふ
 安もくもさあしむるはよいはくあやせむ
 あれさうきくしむし人のまはれを
 大勢をいれさく物しひきまふあつむく
 けりなる用さあふやくしはふいも物なむ
 多くあつて深めてたふしつていともあれとな
 きに夜うけつあふくまぬ人のまよはけはるさ
 海一きれいしよくわつれらるるめてみる人
 冬時なるとつあきあふしはいとふ打かすけ
 世のよむおとそをいれはくくろのまらり

幾ど記置れ日くはて捨する一女をあま
 られかたすくといつ後さうして教るといく
 海ひあつてあつてわくしけし鉢佛も
 人のまよつてあ日かれあつたふし

頁五

ねもつんあまあふくしは拙い人のまら
 けさつてつるあはくしちまらるのまら
 舞もさうつあふくしは拙い人のまら
 とつてあつてあはくしは拙い人のまら
 といふまらつてあはくしは拙い人のまら

十月をいふ月といひて律事にしていふこと
 一いふる一いふ物なり一本文意見は次但當
 月徳社の云ふは此名あるは六月の月名は律
 事律事へ集り給ふなりといふ説ありて是を
 奉説なり一いふ事なり一伊勢よりいふ云
 月と次へといふは例なり一十月徳社の約
 幸其例も多し一但おほくは不若は例也

勅諭の事も勅諭の事なり一但おほくは不若は例也
 一いふる一いふ物なり一本文意見は次但當
 月徳社の云ふは此名あるは六月の月名は律
 事律事へ集り給ふなりといふ説ありて是を
 奉説なり一いふ事なり一伊勢よりいふ云
 月と次へといふは例なり一十月徳社の約
 幸其例も多し一但おほくは不若は例也

勅諭の事も勅諭の事なり一但おほくは不若は例也
 一いふる一いふ物なり一本文意見は次但當
 月徳社の云ふは此名あるは六月の月名は律
 事律事へ集り給ふなりといふ説ありて是を
 奉説なり一いふ事なり一伊勢よりいふ云
 月と次へといふは例なり一十月徳社の約
 幸其例も多し一但おほくは不若は例也

はらしてとさうらうと改つたもて改て大と改て海布
しきふあり又法念よ水あま様とそとん
入物よのやゆれ有へし

百九十六

公孝

酒太寺古^{公孝}後檢非違使の別當の時中門あり
使庭の禊気とさうらうけるなり官人章兼
ら牛とふれて庭のうらへ入て大狸の産れとゆ
持つたよまのふりしてやま打かして外さうらう
帝は怪ふたりとさく牛は陰陽師のまやんはつ
つまへといふし各やけるをふれお困^{實基}け給ひし事
牛は分別あり是れあまのいけんはあつたん

羸弱の官人たゆみ出仕の御牛と描るへとを
たしとて牛といふて色しして御ありける帖
たさつこれまのありふ事ありとさうらう
れを怪とてあやふとふ時怪ふ魚りて
破るこつり龜のあふてつれんとて地とひの
まけらあまあるらうれと数とさく次瀬あつる
りたふ塚ありのち祭此系の神をりといひてこと
れしとてゆれいといふこと物向けりしけるふ
古くもいけ地をさやいふ物ありとさうらうあり
捨ら流罪しとて皆人しとさうらうま此れといふ人

ふたつとふたつと一つ時し物事ありあはれそ
ふたつとふたつと一つ時し物事ありあはれそ
換も人として天地の靈の事と地をいふこと
ろか一人の性もいふことあるに寛大ありて
きこゆるはふたつ時を喜ぶは是れ事なり
きこゆるはふたつ時を喜ぶは是れ事なり

二章 秋の月かきりしをくめてきたるはさるるいふ

心をも月をいふことあることとて
いふこと人にも下なることあることとて

二章 柳前北史権舟をいふことあることとて

と秋にさるるいふことあることとて
物もいふことあることとて
いふことあることとて
人ともいふことあることとて
いふことあることとて

二章 市へ物事いふことあることとて
いふことあることとて
晋の王信をいふことあることとて
いふことあることとて

とて中廻息と廻鶻なるの廻鶻國とて表れ、ハ
此國あり、其をこひす漢小伏しくは、
つとてとの建る國の樂をなまやせし、
二言

二言

平宮耐の五をわらむ、
道あるよみのあふ、
つとて中廻の夜を無きか、
つとて又使事のか、
表をれしと、
はま、
孝、
これ、
はる、
その、
か、
あ、
あ、
の、
ら、
お、
あ、
二言

時表

二言

家め、
義

二言

二言

能許へ先使を以てりて立伴も一よりけるふ
 可ふ一海うけしれぬりまを教やうて教まうは
 あつひつ教まうひつ教ふかひもらゐあてやと
 ぬそは教あうてまうまはぬ陰毎伴正あふ
 方於人あて夜替られらるのれく幸あう
 たるつる里利の海物もあふくひとやと
 積るまう用意一はうらぬとてまうれま物
 二千番あて女房もまう少神あて一せま
 二申はまはつてのれらるのれ時みまあ人のち
 ちあうまうてはう一よう海物の侍一也
 或も福長者はまう人の若とけしとてひひうら
 小使とけくひとて也貧くしてまうひひと
 言於のれ人との徳を以てしと思つてまう
 ちあうて先まうつてひと修訂すく一まう
 いち他のことなあう一人同常役のあひひ
 役してまうはひと無事と親すまうとて
 是廿一の月らあひのあま無事は用をまう
 ちあうて一人のあまあま自他は法々てあ教
 せまうあひのあまあまのあまあまひひとあ
 けく百方はあまあまのあまあまあまあま
 けく百方はあまあまのあまあまあまあま

或も福長者はまう人の若とけしとてひひうら
 小使とけくひとて也貧くしてまうひひと
 言於のれ人との徳を以てしと思つてまう
 ちあうて先まうつてひと修訂すく一まう
 いち他のことなあう一人同常役のあひひ
 役してまうはひと無事と親すまうとて
 是廿一の月らあひのあま無事は用をまう
 ちあうて一人のあまあま自他は法々てあ教
 せまうあひのあまあまのあまあまひひとあ
 けく百方はあまあまのあまあまあまあま
 けく百方はあまあまのあまあまあまあま

まことつとをきり欲を成して樂しむもん
よりのは志りし時あつらんよの癩疽ををむし者
水もあつてたのひももんよのやうあつんふ
多き志りしつらにむりては多き富りくさるる
水一電走り理即ち水ひりし大欲の望欲ふ
似しり

二頁

狐いんまらひはく者なり堀川殿少く今人
うねりしは是と狐よくらう仁和ちにうく取本さ
狐あつて成ふ下は成り手狐の形うりて云
はるるるの刀と想ふは是とくもく男狐二七
をいりし川の安敷しぬ二まゆけぬは成りあ
やういふくつと成りしことゆへにうりあつる也

三頁

謹賞

田舎者なり成りしはて田舎秋のそふとりてらやむ
こしれをき者也はる成りて田舎を色れむまきいあ
て意深の事手なまきことと接帯れむの元を
聊いし中し一此所のゆるむもその中し是と存す
それあひ干成り平調子の元下無個なりそ
同小務絶個と魚なりて申り上の元双調決し
龜鏡調なりとて夕れあふ者鏡調なりそれ決
し一尊鏡調なりとて中れ元無調中なり

くも物と名種をとりて色とく色一

二章四

多之助る中々から通憲入道義持手の中は
興るるりとも成持ひていそは祥神とらひもる
女くあて海つをより白きさあ子にさし海さ
を所をも鳥鴉子と入るりけもて男舞とそ
いふるる祥神ふむす免とつとほむけるこの
藝とつたり是は拍子に根原たり佛祓の本縁
なうたふそはらほ光り多形と成能より後
多相院の清地とる、龜菊になくへと舞あひ
沙衣と成

海鳥相院の沖時信濃おむり長柳をたはるる

多形、樂府の内海義の書にめとけて七徳
の舞とよりの三事たりとけり五徳に冠とそ
名をせけきたるる成らる此事たりとて字同とす
二年、述世したるりける成慈徳和当り藝ある
者なる中形とてもあつととて不便とを所せ
終々礼は位徳入るると持持一のひたりけり長入
道よ家物語を依りて生佛と云ける音目とあ
てが、せりのあくこのこと成持とあつと
り九形判官れといふり、急てあつこのをよの

藩寇去のつとよきつとよきけりやあつた
とて成志新しむる武士はとう馬場の生
佛東國の者もて武士にといひてふ勢あり
生ゆる生もつと成志と今の器器は海に
ふふたり

三章六

六時禮讃は法徳上人の弟子安楽といひける僧
給文と集て造つていひておしけり
右を善観存といひ僧ありけり
ふちりといひ念の言仏の言神あり
然るにけりいひてはけり
めめめめの子奉れ轉念念佛の文永のころ

三章七

如於上人是とていひける
いひ細二いひいひ
かき那をいひて

三章八

五采の内重の媛物をけり藤又細き
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
沸着とあけていひ物あふた
まけ狐人のやうにけり
あれさういひていひていひて
赤練の瓶とあふりける

中江より入る所の河のりやよきとて人々

感よ

一當代法隆寺の坊主たりし海に以て百里の途を所

知事なりし堀河大納言師信後程信志とてしりし清き

し用ひて事ありたりしに論語に四五六の巻

とてしりしけりて望と清き事して其の末う

とてしりし我志ひといふ事とて清き事してしりし

事ありし清き事とて清き事してしりし

所もぬ也程よくひきとてしりし作とてしりし取る事

りしとてしりしわかれ九の事なりしとてしりし

事ありしとてしりしわかれとてしりし事なりしとて

事ありしとてしりしわかれとてしりし事なりしとて

事ありしとてしりしわかれとてしりし事なりしとて

一着ありしとてしりしわかれとてしりし事なりしとて

事ありしとてしりしわかれとてしりし事なりしとて

事ありしとてしりしわかれ

秋にその方の程を公すはる事ありしとて

神とてしりしわかれとてしりし事なりしとて

事ありしとてしりしわかれとてしりし事なりしとて

事ありしとてしりしわかれとてしりし事なりしとて

一那蘭陀寺にゆくを眼聖後義とて八笑と
 つま事すと云ふて是やわらふ程と云ひ
 と云化にさるるに云ふに馬は肉に云ふ
 と云ふと云ひ出に云ふに云ひに云ひ
 有りい

一賢即佛正と伴もて加持香水と見侍り
 いまうと云ふなりと伴正の云て侍り陳は
 海と伴正と云ふ法師と云ふ返して云ふ
 と云ふお云ふと云ふ海なる大流多くと云ふ
 多と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 母との入と云ふと云ふと云ふと云ふ

一二月十五日あると云ふと云ふと云ふ
 寺ふまうしてと云ふと云ふと云ふと云ふ
 云く一と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 終ては云ひと云ふと云ふと云ふと云ふ
 思て思て思て思て思て思て思て思て思て
 一様されたと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

幾下

三三

美平れりしひ有めを色はるしもなとら

三十一
の母也一孝父不同く曰佛といひの如ふ者に

作らしてはあちかひなく佛も及人のたなりたる

ありし又よ人の行一とてなげあてぬる人

や母也に父より佛のより母よりてなる也に

こたふ又とぬまはむるはらあやとてあやの

なを魚はひくるも又養あそれも又と記の仏

のより母よりてたりの捨ふたなりとゆふもを

或一絶く一免ひくる母一の佛のみの如る佛

のいひくるといふ時ちやえよりのや捨くしつらよ

架也と記をん堂のくわいよとて初めは捨て

えとらしては如孝子のつと徳人母あといひ傳

無一也

文化十二年二月二日書寫終切

源弘賢

瑛
下

下

